The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の語彙的複合動詞「V1＋詰める」の意味形成とその認知的メカニズム
Author(s)	蘇, 暁笛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91594
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の語彙的複合動詞「V1＋詰める」の意味形成とその認知的メカニズム

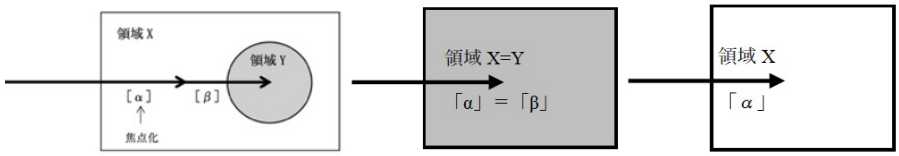
蘇　暁笛

1. 問題提起

現実世界の物理的空間概念は我々人間の身体感覚、日常経験に極めて深く根ざした一番基本的な認知基盤である。また、各言語共同体の社会・文化的枠組みと関わり合いながら、物理的空間概念を基盤とする言語表現は世界の諸言語において数多く存在すると思われる。その中、内・外の対比概念に基づく物理的空間移動を表す動的空間事態がさまざまな概念のソース領域となっている (Lakoff and Johnson, 1980) 。

日本語の語彙的複合動詞では、「～込む」、「～込める」、「～入れる」は外部から内部へという内部移動概念に基づく意味的に類似している後項動詞であると思われるが、それぞれの持つ具体的な意味構造が異なっている。松田 (2004) では、それらの間の意味的異同を、図 1 に示されるイメージ図式の領域構成 (領域 X と領域 Y[1]) と焦点化されるプロセス (領域 X に入るプロセス「α」と領域 Y に入るプロセス「β」) の違いから記述している。

(1)　人を車に｛押しこむ／押しこめる／?押し入れる｝。　(松田 2004: 80)



「押しこむ」　「押しこめる」　「押し入れる」

図 1: 「押しこむ」、「押しこめる」、「押し入れる」のイメージ図式

図 1 からわかるように、「～入れる」のイメージ図式では、領域 X とプロセス「α」としかないのに対し、「～込む」、「～込める」のイメージ図式では、2 つの領域と 2 つのプロセスが関わっている。この点から、「～入れる」と比べ、「～込む」と「～込める」は意味構造がより複雑であり、より多様な意味が生じることが予想される。この点に関して、姫野 (2018) による意味分類からも確認できる。姫野 (2018) によれば、「～入れる」は、「人がものを入れ物などの外から中に動かす」という自立語としての意味がそのまま残っており、メタファーという認知操作によって、物理的領域から抽象的領域への意味拡張が多く見られるが、意味的バリエーションから考えると、「～入れる」の表す意味は比較的に単一で、前項動詞は主に、何かを入れるための目的や方法などを表す。

[1] 領域 Y は領域 X 内の「難可逆的な領域」(＝主観的に、領域 X の外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に存在するわけではない) をイメージしたものである (松田 2004) 。

(2) a. その国は外国の文化をどんどん取り入れた。[2]
b. 家具を新居に運び入れた。

一方、「〜込む」、「〜込める」の意味的バリエーションはより高いことが表 2-3 からわかる。特に、「〜込む」は日本語の語彙的複合動詞の中で、数が一番多く、生産性が一番高い後項動詞であると多くの研究では指摘されている。「〜込む」、「〜込める」の意味構造には、純粋な内部移動だけではなく、領域 Y とプロセス「β」といった内部移動の後段階も含まれているからこそ、意味的多様性が生じたと言えよう。

「〜込む」の意味特徴		例
内部移動		「釘を柱に打ち込む」、「砂が米に混ぜ込む」
程度進行	固着化	「四時間も喋り込む」、「噂を真実と思い込む」
	濃密化	「人が老い込む」、「彼は咳き込んだ」
	累積化	「毎朝 15 キロほど走り込む」、「廊下を磨き込む」

表 2: 「〜込む」の意味分類 (姫野 2018:61-73 参照)

「〜込める」意味特徴	例
内部移動	「雨に降り込められる」
充満	「雲が垂れ込めている」
追い詰め	「子供が親をやり込めた」

表 3: 「〜込める」の意味分類 (姫野 2018:73-75 参照)

本稿では、日本語の複合動詞研究ではあまり注目されておらず、「〜込む」と同じ前項動詞と結合して類似した意味を持つ後項動詞「〜詰める」を取り上げる。「〜詰める」に注目する理由としては、以下の２点を挙げる。

- 「〜詰める」のタイプ頻度[3]は日本語の語彙的複合動詞の中に、それほど高くはないにもかかわらず、[4]意味的な広がりが見られる。それゆえ、「〜詰める」の意味構造にも「β」のような＋α 的な意味要素が存在すると予測できるだろう。

[2] 引用元が明記されていない例文は全て Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)、複合動詞レキシコンから収集したものである。
[3] 「タイプ頻度」という概念は「トークン頻度」とともに、用法基盤モデル (Usage-Based Model) において重要な概念である。個々の具体的な言語表現の生起例を数えることで得られる「トークン頻度」とは違って、「タイプ頻度」はどれだけ異なった種類の表現が出てきたかを数える (早瀬・堀田 2005: 79) 。本稿では、1 つの後項動詞と結合する前項動詞の数を指す。
[4] Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版) と国立国語研究所『複合動詞レキシコン』に収録されている項目を確認した結果、「〜詰める」のタイプ頻度は 15 である。(昇り詰める、登り詰める、上り詰めるは漢字表記の違いによるものであるため、タイプ頻度は 1 となる) 。

(3) 追い詰める、思い詰める、通い詰める、切り詰める、食い詰める、凍り詰める、敷き詰める、煎じ詰める、突き詰める、問い詰める、煮詰める、上り/昇り/登り詰める、張り詰める、引き詰める、見詰める (15 語)

· (4) のように、「〜詰める」は「〜込む」と同じ前項動詞と結合し、類似する意味が生じる場合もあれば、異なる意味が生じる場合もある。それゆえ、「〜詰める」にある「β」は「〜込む」にある「β」とは異なる特徴を示す。

(4) a. 上番者を故意に感染症にかからせ、瀕死の状態に｛追い詰める／追い込む｝ことを目的とする。
b. 果物と砂糖だけを｛煮詰める／??煮込む｝[5]ことで、とろりとした中にも果実の食感と味わいが強く残るジャムを作り上げます。
c. このままでは目標を果たせない、どうしたらいいだろう、と｛*思い込んで／思い詰めて｝犯行に及んだ。 (作例)

そこで本稿の目的は、「〜詰める」を特徴づける「β」とは一体何か、またそれと結合する前項動詞の特徴から「V1＋詰める」の意味形成の仕組みを解明することである。2 節では、関連する先行研究と疑問点を簡単に述べる。3 節では、本稿が援用する理論的枠組みを紹介する。4 節では、まず、単独動詞「詰める」の多義構造を確認した上で、後項動詞「〜詰める」との間の継承関係を明らかにする。また、「〜詰める」の持つ「限界」という意味要素と前項動詞の意味特徴から、「V1＋詰める」の意味形成のあり方を探っていく。5 節はまとめである。

2. 先行研究

まず、単独動詞「詰める」に関して、深田 (2003) は、「〜込む」、「込める」と同様、「詰める」も＜容器＞のイメージ・スキーマ[6]の機能的側面を顕在化させる言語表現であると主張している。図 4 が示すように、＜容器＞のイメージ・スキーマの主な構造的要素として、＜内部＞、＜境界＞、＜外部＞ がある。(Lakoff 1987: 272)

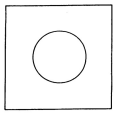


図 4: ＜容器＞のイメージ・スキーマ

[5] 例文に付けた“??”記号は、人によっては容認できるかもしれないが、ここでは、文脈にそぐわない意味になっている、また、他方に比べると違和感があるという状況を示すものとして用いている。
[6] 我々人間は自分の身体構造、また日常経験に基づき、「何かの中に何かがある」というイメージがよく浮かぶ。この抽象的なイメージを構造化したものが＜容器＞のイメージ・スキーマと呼ばれる。

また、＜容器＞のイメージ・スキーマは通常の空間的側面以外、機能的な側面もあると考えられる。Johnson (1987: 19-22) によると、この構造から、外部からの力を遮断する、外部から内部のものを守る、内部のものを固定する、内部のものを外部から見えなくするなどのような含意が導き出される。これらの含意は＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面と呼ばれ、一般に、容器性が高くなればなるほど、機能的側面が顕在化し、容器性が低くなればなるほど、機能的側面が希薄化し、単に＜境界＞として機能するようになる。(深田 2003)

(5) の「かける」と比べ、「注ぐ/注ぎ込む」の場合、＜息子＞が愛情を内部にためて保存することのできる対象、すなわち、ある種の容器として捉えられていることがわかる。これは＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面によって導き出されたものであると考えられる。また、 (6) の「入れる」と比べ、「込める」を用いる場合、弾がカラカラと動くことなくきちんと装填されたことを表すため、内部のものを固定するという＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化されている。

(7) の「詰める」は箱と共起できるが、平面的で、中に入れられたものを固定することができない「皿」とは共起できない。このことから、「詰める」も＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面を顕在化させる言語表現であると主張されている。

(5) 母親が息子に愛情を｛かける/注ぐ/注ぎ込む｝。
(6) 男は、ピストルに弾を｛入れた/込めた｝。
(7) ｛*皿/箱｝にりんごを詰める。 (深田 2003: 343-345)

しかしながら、(8) における「詰める」と共起する着点である「窓の隙間」、「コップの間」をある種の「容器」とみなすことは無理があると考える。この場合、「詰める」はかなり低い「容器性」を持っており、「窓の隙間」、「コップの間」は３次元の「容器」より、２次元の＜境界＞として機能していると言えるだろう。つまり、「詰める」と共起できる着点は、３次元「容器」であれ、２次元の「隙間」であれ、一定の範囲・限界を持つ場所でなければならないと考えられる。

(8) a. 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。
b. コップの間には樹脂製の緩衝剤がたくさん詰められていて、どれも割れずに届きました。

松本 (1997) では、「詰める」を移動に伴う付帯変化を包入した使役移動動詞として挙げられている。「詰める」の意味構造を動詞の行為連鎖で表示すると、［行為―変化―結果状態］となる。それと結合する前項動詞には、使役の手段を表すものが多くみられる。また、影山 (2013, 2021) によれば、「V1＋詰める」は「語彙的アスペクトの複合動詞」[7]に分類されるもので、V1 が意味の中心にあり、「～詰める」は V1 の動作や出来事の様子を描写するだけである。

さらに、影山 (2013, 2021) は語彙的アスペクト的複合動詞を 2 つのグループに大別して

[7] 影山 (2013) は、前項動詞と後項動詞の意味関係に基づき、語彙的複合動詞をさらに「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の 2 つに分類することを提案している。「アスペクト複合動詞」の場合、V2 は V1 を修飾し、V1 が表す事象のあり方について意味を補足する (影山 2013: 12) 。

いる。1 つは、V2 が V1 の事象に対して「開始」、「継続」、「中断」、「終了」などの時間的アスペクトの意味を付け加えるタイプであり、もう 1 つは V1 の出来事や動作の様子を V2 の動詞が副詞的に描写するタイプである。(9) の「煮詰める」は「煮ることを最後まで行う」に書き換えることができることから、V2「〜詰める」はここで「事象の終了・完遂」という時間的アスペクトの意味を表すと主張している。

(9) シロップを煮詰める ≒ シロップを煮ることを最後まで行う。(影山 2021: 160)

V2「〜詰める」と結合することによって、「煮る」という事象が終了することになるという説明は納得できるものだが、「事象の終了・完遂」は必ずしも後項動詞「〜詰める」の核の意味ではない。それより、最終的にどのような結果状態に達成すべきかのほうがより重要視されている。「煮詰める」の場合、「煮ることを最後まで行う」のような「事象の終了・完遂」は、「水分がなくなる」のような結果状態に達成するための手段として取り扱われているだけである。

本稿は、以上のような先行研究の知見を踏まえ、「詰める」と「〜詰める」を特徴づける本質的な意味特徴を探っていく。またそれに基づき、「V1＋詰める」の意味形成を考察する。

3. コア・アプローチ

田中 (1987) によると、多義というのは、その単語が持つ本来の意味より、具体的な使用文脈から推測したものを指すことが多い。1 つの多義語には、どのようなコンテクストの中でも変わらない核のような一定の意味が存在することが想定される。コア理論では、このようなコンテクスト情報を捨象した“context-free meaning”、複数のイグゼンプラの背後に潜む最大公約数的な意味を「コア」と呼ぶ (田中 1987: 32) 。

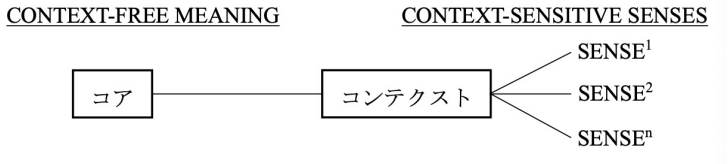


図 5: コアと語義 (田中 1987: 32)

コア・アプローチのほか、多義性を分析する際、プロトタイプ・アプローチもよく援用される。コアは“de-contextual”であるのに対し、プロトタイプは“contextual”であると考えられる。また、プロトタイプ・アプローチでは、典型的な中心義、また複数の語義の間の連続性が重視されており、中心義から放射状的なカテゴリーが形成されている。

本稿の分析対象「V1＋詰める」の後項動詞「〜詰める」は、単独動詞「詰める」との間に明確な継承関係があるため (詳しくは 4.1 を参照されたい) 、「V1＋詰める」の多義性を分析する際、プロトタイプ・アプローチより、コア・アプローチのほうがより有効であると考える。したがって、本稿は、「V1＋詰める」のコア的意味を記述したうえで、具体的にどのような前項動詞と結合するかによって、意味形成のあり方を分析していく。

4. 考察

4.1. 単独動詞「詰める」との継承関係

本節はまず、単独動詞「詰める」の意味について確認しておく。[8]図 6 からわかるように、国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』では、単独動詞「詰める」のコア的な意味

[8] 紙幅の都合上、本節は「V1＋詰める」の意味分析と主に関連する意味のみを取り上げる。

を「人が容器の限度いっぱいに、隙間なく物を入れる」と定義している。この場合、＜人が容器に物を詰める＞という文型が一般的とられている。

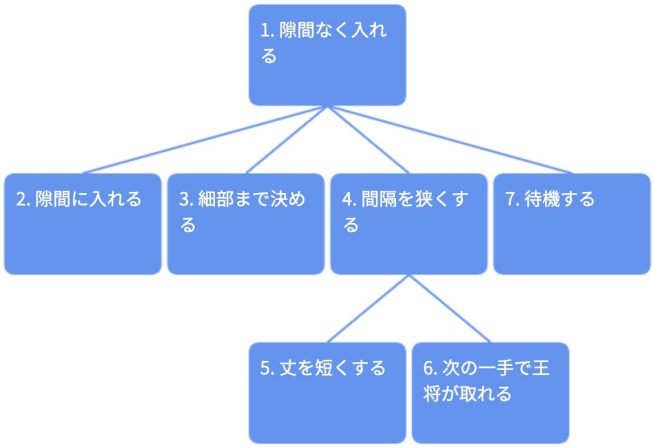


図 6: 「詰める」の意味拡張を視覚化した多義ネットワーク[9]

(10) (…) 時間が迫っていたので、大慌てでスーツケースに荷物を詰めた。[10] (語義 1)
(11) 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。 (語義 2)

(12) (…) 春までには計画を詰め、工事にとりかかる予定だ。 (語義 3)
(13) a. (…) 細かな字をびっしりと詰めて書く学生がいる。(語義 4)
b. 年配のご夫婦が並んで座れるように席を詰めてあげました。(語義 4)
(14) a. (…) どのスカートもぶかぶかなので、全部ウェストを詰めてもらった。 (語義 5)
b. 引き受けた仕事に失敗をすれば、小指を詰めなければならないなどということが、暴力団の世界では実際にあるのですか。(語義 5)

(10-11) とは異なり、(12-14) ではニ格場所句が明示されていない。語義 3 の場合、移動の着点はヲ格によって明示されており、着点目的語「計画」にもっと具体的な詳細を詰めるという抽象的な移動を意味する。この場合、「計画」は最終的に改善されるという状態変化があるため、壁塗り交替によって、「計画」は直接目的語の位置に現れることになる。また、(13) のコンテクストを分析すると、ヲ格目的語「字」、「席」[11]をその自体に「詰める」という意味合いになっている。 語義 4 の場合、ヲ格目的語は通常複数のものであり、それらの間の間隔を狭くすることによって、その全体が占める範囲が小さくなることが想定される。カットされたのように、全体としてのサイズは視覚的に短くなっている。一方、語義 5 がとるヲ格目的語は単数であり、「詰める」は「間隔を狭くする」のではなく、「丈を短くする」という意味となる。語義 4 から語義 5 への拡張は＜原因―結果＞に基づくメトニミーによって動機づけられていると考えられる。

2 節でも指摘したが、単独動詞「詰める」の意味には「容器」という要素が必ずしも関わっているわけではない。後項動詞「～詰める」に関しても、同じようなことが言えると

[9] 引用先は国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』 (https://verbhandbook.ninjal.ac.jp) である。
[10] 単独動詞「詰める」に関する例文 (13-17) はすべて国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』 (https://verbhandbook.ninjal.ac.jp) から引用したものである。
[11]「席を詰める」はより多くの人が座れるように 1 人分の座る範囲を狭めることを指す。しかし、実際に詰められたのは文字通りの「席」ではなく、「席に座っている人たち」である。つまり、このフレーズは、「席に座っている人たち」をそれと空間的隣接関係にある「席」を用いて表現するメトニミー的表現であると考えられる。

考える。

(15) 刑事は犯人を｛追い詰める/追い込む｝。(作例)
(16) このままでは目標を果たせない、どうしたらいいだろう、と｛*思い込んで／思い詰めて｝犯行に及んだ。 (＝ (4c))

(15) では、「追い詰める」と「追い込む」両方が容認されるが、どのような文脈でよく用いられるかは異なる。「追い詰める」を用いる場合、「犯人が逃走を続けていたが、刑事が綿密な捜査を行い、最終的に犯人を包囲し、逃げ場をなくした」のような物理的な状況が想定されやすい。一方、「追い込む」を用いる場合、「刑事が徹底的な尋問で犯人を追い込み、最終的には犯行を自白させた」という抽象的な状況が想定されやすい。また、DB[12]に収録されている実例において、「追い込む」のニ格の出現ページ数[13]は 802 ページであるのに対し、「追い詰める」は 33 ページしかない。つまり、「追い詰める」を用いる場合、必ずしも結果としての特定の場所・状態を提示する必要がなく、相手を不利の状況に陥れることが焦点となっている。一方、「追い込む」の場合、特定の場所・状態の提示が不可欠であり、そこにとどめることが焦点である。この点に関して、 (16) の容認度の差からも確認できる。「どうしたらいいだろう」からわかるように、「思い込む」が容認されないのは、「思う」の「内容物」がないからである。

したがって、本稿は、「～込む」を特徴づけるものは「容器性」であるのに対し、「～詰める」を特徴づけるのは「限界」であると主張したい。ここでは、V1 の表す行為をそれ以上行うことができないという意味で「限界」という概念を使用している。「～詰める」は「中途半端まで・途中まで・適当に」のような表現と共起しないのも「限界」という意味要素が働いているからである。これに基づき、本稿は「V1＋詰める」のコア的意味を＜限界まで V1 を行う＞と記述する。

4.2. 「限界」の意味を強調する「V1＋詰める」の意味形成

本節は、 (3) に挙げられた 15 個の「V1＋詰める」を分析対象とし、＜限界まで V1 を行う＞というコア的意味における「限界」は具体的にどのような限界を指すかによって、「物理的限界」と「抽象的限界」2 つの意味形成パターンに分けて考察していく。

ただし、 (17-18) の「切り詰める」と「引き詰める」には、単独動詞「詰める」本来が持つ語彙的意味 (語義 5) を保持しているため、「主題関係複合動詞」[14]に分類されるものであると思われる。以下の考察では、この 2 例を除外する。

(17) a. 放置しているよりはやはり枝を短く切り詰めるほうがよろしいでしょう。
b. 奥さんを信じ、家計を切り詰める覚悟を決めた。
(18) いつも髪を引き詰めるヘアースタイルをしていますとその部分が脱毛します。

4.2.1. 「物理的限界」

まず、「物理的限界」という意味要素に関わる「V1＋詰める」の意味形成について見ていく。

(19) a. 相手をコーナーに追い詰める時のガードしながら前進の戦法です。

---

[12] Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版) を指す。
[13] DB は Web データの性質を考慮して、格要素は出現頻度ではなく、「出現ページ数」で計測している。なお、まったく同一の用例は、複数の Web ページに出現していたとしても、出現ページ数 1 とカウントしている。
[14]「主題関係複合動詞」は「V1 が V2 を修飾することで、「V1 て、V2」が持つ様々な意味に解釈される」とされている (影山 2013: 12) 。

b. ないものねだりや高望みをしていると却って自分を追い詰める結果になってしまうので…

(20) a. 柱の外側に板状の断熱材を途切れることなく張り詰めるのが「外断熱」です。
b. 映像的な気持ち悪さではなく緊張感が張り詰める心理的な怖さ。

(21) a. 階段を上り詰めると、広くはないが砂利の敷き詰められた境内がある。
b. 菅直人氏が草の根から政治活動を初めて、今日、総理大臣の地位に上り詰めたことは事実だ。

(22) マットの下に防音シートを敷き詰める。

(23) 問題をさらに詳しく突き詰めると、本質的な課題にぶつかります。

(19a, 20a, 21a, 22) はすべて物理的移動を伴っている表現である。「追い詰める」、「張り詰める」、「上り詰める」はメタファーによって、 (19b, 20b, 21b) のような抽象的領域でも用いられる。 (23) の「突き詰める」は問題・原因・本質・物事のような目的語と共起し、抽象的な領域でしか用いられないが、前項動詞「突く」自体がメタファー的拡張されているため (cf.「ポイントを突く」) 、「突き詰める」の原点には物理的移動があると考えられる。

前項にくる動詞「追う」、「張る」、「上る」、「敷く」、「突く」はすべて運動性 (非状態性) と意志性を持つ活動動詞[15]であり、「限界」に達成する手段として捉えられる。「～詰める」と結合することによって、完了性 (非継続性) と変化の結果を持つようになると考えられる。

	状態動詞 (State Verbs)	活動動詞 (Activity Verbs)	到達動詞 (Achievement Verbs)	達成動詞 (Accomplishment Verbs)
完了性	－	－	＋	＋
運動性	－	＋	－	＋
意志性	－	＋	－	＋
変化の結果	－	－	＋	＋

表 7: Vendler (1967) の 4 種の動詞の意味素性 (表は (吉田 2012: 43) を引用)

(19-23) からわかるように、 他動詞「追い詰める」、「敷き詰める」の場合、移動物は目的語の位置、動作主は主語の位置に表れている。動作主は、移動物を収容する物理的スペースをなくすために、V1 の行為を行うことを表す。自動詞「上り詰める」の場合、移動物は主語の位置に現れている。移動物は、V1 という行為を行う物理的スペースがなくなるまで、ずっと V1 という行為を行うことを表す。「張り詰める」は他動詞的用法と自動詞的用法両方を持つ語彙項目である。また、「突き詰める」の場合、「本質的な課題」は通常「問題」という抽象的な空間スペースの一番奥にあるため、「本質的な課題」よりもっと奥のほうに突くことができないことを表す。

したがって、これらの「V1＋詰める」の意味形成には「物理的限界」という意味要素が働いていると考えられる。

4.2.2. 抽象的限界

前述した 4 語と同様に、 (24) の 8 語の V2「～詰める」は V1 の事象を副詞的に修飾し、V1 が表す事象のあり方について意味を補足している。一方、前述した 4 語とは違って、(24) の 8 語にはなんらかの空間的な移動が存在しておらず、ある種の「抽象的限界」が働いていると考えられる。

[15] Vendler (1967) の動詞 4 分類 (状態動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞) の 1 つである。

(24) 思い詰める、通い詰める、食い詰める、凍り詰める、問い詰める、見詰める、煎じ詰める、煮詰める (8 語)

空間的な移動が伴っていない点から、これらの「V1＋詰める」を特徴づける「限界」は抽象的なものであると主張しているが、どのような意味で抽象的であるかに関しては、前項動詞の意味特徴、また使用文脈を確認する必要がある。

(25) 単なる偶然に過ぎないことを、ここまで深く思い詰めるのが、自分の悪癖であることは重々承知している。
(26) 頻繁にお店に通い詰めると店員に顔を覚えられることもしばしば。
(27) 彼は都会で食い詰めて、田舎に帰った。
(28) 味方のオウンゴールで、一瞬、競技場が凍り詰めたように静まった。
(29) 数子は美和に理由を問い詰めるが、美和はその理由をなかなか話さない。
(30) a. パソコンの前に座り、じっと画面を見詰める。
b. 深く自分を見詰める為には、深い人生経験が要求されている。

(25-30) のコンテクストを確認すると、これらの「V1＋詰める」の意味解釈はすべて主観的な程度問題と関わっており、「物理的限界」のような、一定の客観的な基準が存在するわけではない。「思い詰める」は「あまり」、「そんなに」、「ほど」、「深く」のような副詞的修飾語と共起し、人間の意識・思考の限界まで思考することを表す。マイナスな文脈でよく用いられる。また、「通い詰める」は、「毎日」、「連日」、「頻繁に」などのような時間的修飾語と共起し、一回きりの行為ではなく、「通う」という行為を複数回行うことを表すため、ここでの「抽象的限界」は回数の限界を指すと考えられる。

(27) の「食い詰める」の場合、「食う」は「生活する」、「生計を立てる」という意味として用いられている (cf. 「音楽だけで食っていけない」) 。「食い詰める」は、貧困状態の限界に達し、それ以上食べていけることができないことを表す。 (28) では、「凍り詰める」がメタファー的に用いられている。温度が下がると、より硬く凍ることが予想されるため、「凍る」程度の限界を表す。(29) の「問い詰める」は、相手が真実を言うまで、「問う」という行為を長時間・継続的に行うことを表す。

(30) の「見詰める」は、対象となる目的語によって、異なる解釈になる。(30a) 目的語は「パソコンの画面」であるため、「見る」という行為を長時間・継続的に行うことを表す。時間の限界であると言える。これに対し、 (30b) において、「見詰める」対象は「自分」であり、「本質的な自分」を見つけるため、「自分」の奥まで視線が移動することが想定される。この場合、「抽象的限界」より、「物理的限界」に関わっていると考えられる。

「煎じ詰める」、「煮詰める」は料理作りの場面以外に、(31-32) のような文脈でもよく用いられる。これは、単独動詞「詰める」の語義 3 から継承された用法として捉えることができるだろう。

(31) ゴミ問題を煎じ詰めると環境問題に行き着く。
(32) 彼らはこの案をじっくり煮詰めた。

以上の分析からわかるように、「抽象的限界」は具体的に何を指すかは前項動詞の意味特徴によって異なる。また、それらの「抽象的限界」に達するために、具体的に V1 の行為をどのように行うかも異なってくる。このような性質があるからこそ、「V1＋詰める」には多様な意味解釈が拡張されると考えられる。

5. まとめ

本稿は、「V1＋詰める」の意味形成を考察するには、まず単独動詞「詰める」の多義構

造を確認した。また、「～込む」の使用状況との比較を通して、単独動詞「詰める」と後項動詞「～詰める」を特徴づけるのが「限界」であることがわかった。その間の継承関係に基づき、「V1＋詰める」のコア的意味を＜限界まで V1 を行う＞と記述した。最後は、前項動詞に空間的移動が伴うか否かなどの意味特徴によって、「限界」という意味要素はさらに「物理的限界」と「抽象的限界」に分けることができることについて論じた。

参考文献

影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社.

影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系」、影山編『複合動詞研究の最前端―謎の解明に向けて』、3-49.

影山太郎 (2021) 『点と線の言語学―言語類型から見えた日本語の本質―』くろしお出版.

田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論―Lexico-Semantics of English Basic Verbs: Exploration into Lexical Core and Prototype』三友社.

田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』研究社.

姫野昌子 (2018) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究－認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房.

深田智 (2003) 「イメージ・スキーマを介した言語意味論へのアプローチ」『認知言語学会論文集』3、343-346.

Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George, and Johnson, Mark. (1980). *Metaphors We Live by.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論― 言語から見た人間の心』紀伊国屋書店.)

Vendler, Zeno. (1967) *Linguistic in Philosophy,* Cornell University Press.

コーパス

Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)

(https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php)

国立国語研究所『複合動詞レキシコン』 (https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/)

国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』(https://verbhandbook.ninjal.ac.jp)